

A・MUSEUM

vol.92
[2017.9.15]



ミュージアムパーク
茨城県自然博物館



ホソエノヌカホコリの子実体



パークレイホネホコリの变形体

ふしぎ？かわいい！変形菌の魅力

「^{へんけいきん}変形菌」という生きものを知っていますか。雨上がりの天気の良い日、森の朽ち木や公園の落ち葉などを注意深く観察すると、大きさ数mmほどの小さなきのこのようなものがびっしりと生えているのを見つけることがあります。また、朽ち木や落ち葉を裏返すと、白や黄、赤など、さまざまな色のねばねばしたものに会うことができます。きっとそれは「^{かいさい きかくてん}変形菌」です。

2018年2月から開催する企画展は、この「^{かいさい きかくてん}変形菌」が主役です。その大きさから想像できないほど多彩な形や色を見せる子実体や、巨大なアメーバ「^{きょだい へんけいたい}変形体」の動くようすはもちろんのこと、変形菌と最新技術との意外な接点なども紹介し、さまざまな角度から変形菌の魅力に迫ります。ご期待ください。（資料課 宮本卓也）

**第70回
企画展**

サメ展 —ミュージアムパーク・コレクション— SHARKS -The Ibaraki Nature Museum Shark Collection-

海洋の生態系の頂点に君臨し^{あつとてき}圧倒的な存在感を放つ生物，“サメ”。サメは人を襲う^{おそ}獰猛な魚というイメージがあります。しかし、実際の生物としてのサメは、多くの人がもつ^{おそ}恐ろしい怪物^{かいぶつ}のようなイメージとは大きく異なります。

では、サメを表現する上で最も適切な言葉は何でしょうか。それは「多様性」です。現在わかっているものだけでも、サメは全世界の海に500種以上が生息しています。海の砂漠とよばれる外洋にも、暗く冷たい深海にも、氷に閉ざされた極海域にも、彼らはたくましく生きています。多様な環境に^{かんきよう}適応した結果、その形態・生態は非常に多岐にわたり、魚類のなかで最も大きくなるものから、魚類最強の顎をもつもの、古生代からタイムスリップしてきたようなすがたをしたもの、^{おどろ}驚くほど奇妙な習性をもつものまで、まさに千差万別です。

当館には国内有数の規模と内容を誇るサメ標本が収蔵されています。今回の企画展「サメ展—ミュージアムパーク・コレクション—」では、当館秘蔵のサメ標本を一挙に展示します。これほどの数の標本を一堂にそろえて展示する機会はなかなかありません。また、本企画展では、貴重な標本を未来に残すための剥製修復^{はくせいしゅうかい}や、サメと人との関わりなどについても紹介してい

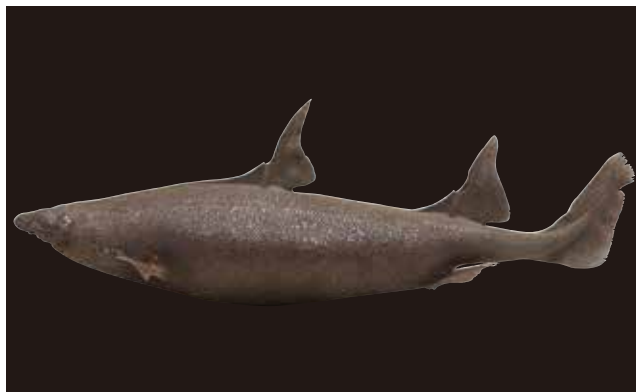
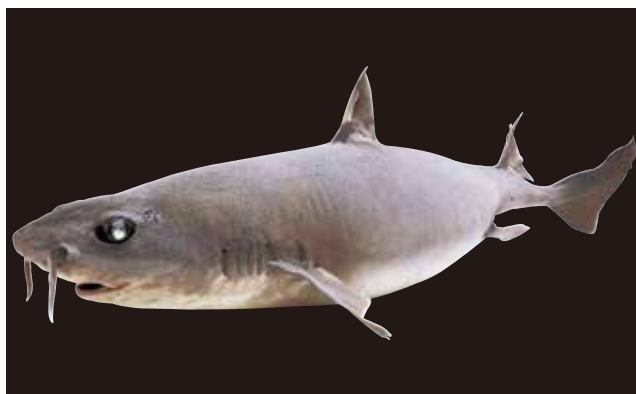
ます。

“Same” are not the same! (=サメ (same) はみな同じ (same) ではない!) を合言葉に、恐ろしいだけではなく、多様性にあふれるサメのすがたを、ぜひこの機会にじっくりと観察してみてください。

(資料課 土屋 勝)

展示構成

- 第1章 サメのからだ
- 第2章 古代のサメのなかま
- 第3章 サメコレクション大集合
- 第4章 サメと人と



修復中のオオワニザメ

ヒゲツノザメ(上), オロシザメ(下) いずれも国内で確認されている剥製標本は2体のみ

会 期 2017年10月7日(土)から
2018年1月28日(日)まで

開館時間 10月7日(土)は午後1時からの公開となります。
9:30～17:00 (入館は16:30まで)

休 館 日 毎週月曜日
※10月9日(月), 11月13日(月), 1月8日(月)は開館し、翌日が休館となります。
※1月2日(火), 1月3日(水)は開館します。
※12月28日(木)～1月1日(月)は休館となります。

●自然講座 サメのお話

日 時 10月7日(土) 13:30～15:00
講 師 仲谷一宏氏 (北海道大学)
場 所 博物館内
対 象 小学生以上 (小学生は保護者同伴)
定 員 300名 (事前申込み・先着順)

**●自然講座 いろいろな化石ザメ～4億年の歴史をさぐる～
(国際化石の日記念イベント)**

日 時 10月15日(日) 13:30～15:30
講 師 高桑祐司氏 (群馬県立自然史博物館)
場 所 博物館内
対 象 小学4年生以上 (小学生は保護者同伴)
定 員 30名 (事前申込み・先着順)

●自然観察会 大洗水族館のバックヤードツアー

日 時 11月11日(土) 13:00～15:30
講 師 徳永幸太郎氏 (アクアワールド茨城県大洗水族館)
場 所 アクアワールド茨城県大洗水族館
対 象 小学生以上 (小学生は保護者同伴)
定 員 50名 (事前申込み・抽選)
備 考 別途水族館への入館料が必要

植物標本のつくり方

博物館の標本 2

植物標本の種類には、大きく分けて3つ、乾燥標本^{かんそう}、液浸標本^{えきしん}、プレパラート標本^めがあります。乾燥標本は、その名のとおり、植物体から水分を抜き、乾燥させる方法です。場所をとらずに長期間の保存ができる点で優れており、一番よく用いられます。液浸標本は、アルコール液やホルマリン液に入れて保管する方法で、立体的で壊れやすいランの花などを保存するときに用います。プレパラート標本は、花粉や孢子^{ほうし}、染色体などを顕微鏡で観察するときに用います。

維管束をもつ植物（樹木、草本、シダ）の乾燥標本は、「押し葉標本」でおなじみです。当館の収蔵庫には、約10万点の押し葉標本が保管されています。今回は、押し葉標本のつくり方を紹介^{しょうかい}します。

まずは野外で植物を採集します。根・茎・葉に加えて、花や果実など、その植物の特徴が最もよく表現されている部位を含めて採集します。シダの場合、葉の裏の孢子や地際の鱗片などの特徴も重要です。ただし、大きな樹木などはすべてを採ることはできません。そこで目的にあった植物の一部を選んで採集する必要があります。採集の際には、自然保護に気を付けます。数の少ない植物は、たくさん生えている場所から採るようにしたり、法律等で規制されている場所では、採集しないようにしたりします。種名はあとから付けることができますが、採集場所、日付、採集者は忘れずに記録します。

つぎに、採集した植物を新聞紙にはさんで押します。このとき、野冊という板をもっていると、現地できれいに押すことができます。新聞紙を半分に切り、半分に折ったA3サイズにするのが一般的です。新聞紙にうまく収まるように、標本を折り曲げます。どうしても収まらない場合は、いくつかに切断し、何枚かに分けます。何段も枝が出ていて植物が重なるときは、枝の基部を残して切り落とすこともあります。また壊れ

やすい薄い花びらはティッシュペーパーで包みます。葉の裏面と表面が両方観察できるように、一部は裏返して押すようにします。このようにして植物を挟んだ新聞紙は、何枚か束にして板に挟み紐でくくります。

野外から室内に戻ったら、植物を乾燥させます。乾燥には2種類の方法があります。丁寧に作る場合は吸湿紙を用います。植物を挟んだ新聞紙と吸湿紙を交互に重ね、上から重しをかけます。毎日1回吸湿紙を取り替えると、1週間から10日ほどで乾燥してきます。たくさんつくる場合は乾燥機を用います。植物を挟んだ新聞紙と段ボールを交互に積み重ね、全体を紐で締め付けます。その後、約70℃で2日間かけて標本を乾燥しています。

乾燥した植物は、台紙にはり、ラベルをつけることではじめて押し葉標本となります。ラベルには、和名と学名、採集場所、日付、採集者、生育環境などの情報を記入します。博物館では、標本番号というものを付けて、管理しています。

ちなみに、地衣類やコケは採集後、紙の袋にいれてそのまま乾燥させます。キノコは温風を当てて乾燥させたり、立体的な形を残すために凍結乾燥標本にすることもあります。（資料課 伊藤彩乃）



植物標本の作製風景(当館のボランティア植物チーム)

中国の玉の文化

「玉」とよばれる宝石があります。18世紀以前の中国の玉は、北西部のホータンで産出する白い緻密な岩石で、角閃石からできています。現在では軟玉とよばれるものです。最も有名な玉は中国戦国時代の「和氏の璧」で、秦の国が15の城と交換すると持ちかけた玉です。中国では玉が最も価値があり、それに続いて金銀銅の序列がありました。日本には、西暦57年に光武帝が与えたとされる「漢倭

奴国王」と彫られた金印がありますが、序列としては玉の下の位に与えられたものです。これに対して硬玉とよばれるものはヒスイ輝石からできています。世界のヒスイのほとんどはミャンマーで産出し、中国が18世紀にミャンマーに侵略した後にヒスイの宝飾品がつくられるようになりました。現在、最も有名なものは「翠玉白菜」と呼ばれ、台湾の故宮博物院が所蔵しています。実は、日本には、ヒ

館長コラム by director YOKOYAMA

スイ文化が中国よりはるか前に花開いていました。この話は次回に！



イラスト：小泉美絵（ミュージアムコンパニオン）

コツボゴケお見合い大作戦！

研究報告 1

当館の花木の広場に、調査中と書かれた札が下がっている四角い区画があります。この中には、コツボゴケという、どこにでもいるコケが生育しています。ここで私たちはささやかな実験を行いました。

コツボゴケには、雄株と雌株があり、その2つがそろわないと受精が起きません。博物館の野外施設には雄株と雌株の両方があったのですが、雄株はとて少なく、昆虫の森にしかありませんでした。一番近い雌株までは約30mの距離があり、これだけ距離があると小さいコケにとって受精は難しいようで、長らくコツボゴケの受精は博物館内では確認されていませんでした。

当館のコケ好きのボランティアにこの話をしたところ、面白い実験のアイデアを提案してくれました。雄株を雌株の近くに移植して、受精するかどうかみてみようということです。名付けて「コツボゴケお見合い大作戦」がスタートしました。

移植は2010年に行いました。雄株を雌株の大きな群落の中心に移植し、調査中の囲いをつくりました。残念ながらこの年は、移植した時には既に精子の放出が終わっていたようで、受精は見られませんでした。変化が起きたのは翌年です。春、移植した雄株の大半は枯れてしまっ

たのですが、その中から1本だけ雄株が出てきました。しばらく観察を続けると、その雄株を中心に、たくさんの小さな胞子体（受精後にできる器官）が出てきたのです！博物館ではじめてコツボゴケの受精を確認した瞬間でした。

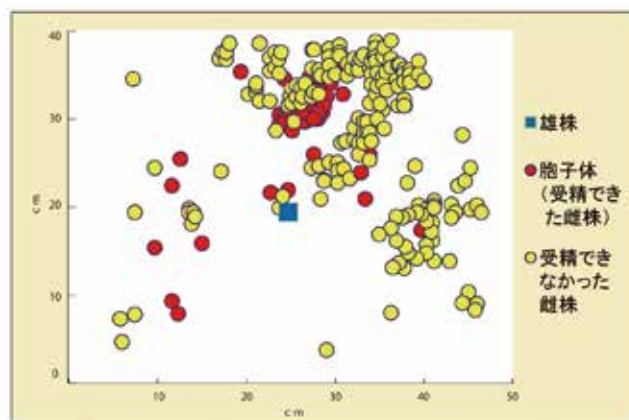
胞子体はぐんぐん成長し、翌年に立派な胞子のうを付けました。胞子体は全部で45個体確認できました。雄株から胞子体までの距離は一番近いもので約17cmであることがわかりました。コツボゴケの雄株の背丈は3cmくらいですので、その6倍近くの距離まで精子が到達したことになります。

胞子のうの中には、雄の胞子と雌の胞子が半分ずつ入っています。その翌年の2013年には、ばらまかれた胞子から成長した雄株が、博物館のあちこちに確認できました。そして、調査中の50cm×40cmの区画の中に、胞子体が353個体も確認できました。

コケの精子がどのくらいの距離まで届くのかということは、これまであまり実験が行われていませんでしたので、この結果を日本蘚苔類学会（コケの学会）で発表しました。とても身近な場所でも、ひらめきと地道な観察で、発見が得られることがあります。ぜひみなさんも、「どうしてだろう?」と「やってみよう!」を大切にしてみてください。（企画課 鵜沢美穂子）



コツボゴケの雄株(左)、雌株(中央)、胞子体(右)



コツボゴケの移植実験の結果(2012年の実験結果)

マンボウのなかま

のほほんとした表情のやんわり癒やし系の生きもの、マンボウ。実は3種類いますが、そのなかまを紹介します。

1種類目は「マンボウ」。みなさんが思い浮かべるマンボウはおそらくこのマンボウです。ビート板のような体型で、お尻側にあるひれ（舵びれ）が波のような形をしています。

2種類目は「ウシマンボウ」。舵びれは丸く、頭部が大きくでっぱります。正面から見たすがたもポコポコしているのが特徴です。かなり大型に

なり、体長が3.5m、体重は1トンを超える個体も捕獲されています。

3種類目は「カクレマンボウ」。今年の7月に新種として記載されたばかりのマンボウです。特徴は目の上にでっぱりがあることと、丸い舵びれの中心が1か所だけへこんでいることです。

さて、当館第3展示室にもマンボウの剥製がありますが、どのマンボウでしょうか。ぜひ観察して種類を当ててください。

（ミュージアムコンパニオン 藤 晴香）

小さな発見—ミュージアムコンパニオン—



ウシマンボウ

標本から明らかになった茨城県産変形菌

研究報告 2

国立科学博物館の萩原博光氏と日本変形菌研究会の鈴木博氏と共同で、茨城県産変形菌標本の再調査を進めてきました。国立科学博物館および当館に収蔵されている3,731点の茨城県産変形菌標本をもう一度顕微鏡で観察したところ、さまざまなことがわかってきました。

この調査によって、茨城県産変形菌として233種類の変形菌が確認されました。このうち、127種類は茨城県ではじめて確認されたものでした。今回確認された茨城県産変形菌の種数を他県のものと比較すると、国内でもっともよく調査されている高知県（407種類）よりは少ないものの、2番目に多い栃木県（229種類）を超える種数の変形菌が確認できたことになります。

変形菌の種数を月ごとにまとめ、高知県と茨城県で比較してみると、一年を通しての種数の増減は同じ傾向を示すものの、11月から3月に発生する変形菌の種数についてみると、高知県は茨城県よりも3倍ほど多くなっていました。今後茨城県では、晩秋から春にかけての調査を充実させる必要があるといえます。

また、A・MUSEUM vol.88でお伝えしました、当館野外施設で採集された、子実体内の細毛体にとげがみられないヘビヌカホコリはその後の調査の結果、非常に

わずかなとげが細毛体に確認できたため、普通にみられるヘビヌカホコリ（*Hemitrichia serpulula*）であることがわかりました。今回、たくさんのヘビヌカホコリの標本を比較することで、細毛体のとげは、個体によってその生え方にかなりの差があることがわかりました。

また、ウリホコリ（*Leocarpus fragilis*）は、これまでは、「日本産のウリホコリ属の種は調べた限りでは胞子が癒着した型なので、ムレミウリホコリとして分類した方が合理的」（山本、2011）とされていましたが、今回の調査では、明らかに胞子がばらばらになっている標本が確認できました。さらに子実体の形や色も違いがみられたので、今回の調査では、胞子がばらばらになっているものをウリホコリ、数個ずつ固まりになっているものをムレミウリホコリ（*Leocarpus fragilis* var. *bisporus*）としました。

今回は、収蔵標本をもとに茨城県産変形菌を探りましたが、変形菌の子実体は大変小さいもので、まだみつからないものも多数あることが予想されます。茨城県内でも標本がまだまったく採集されていない市町村がたくさんあるので、こうした地域で重点的に調査を進めていき、茨城県産変形菌の情報をさらに充実させていこうと思います。（資料課 宮本卓也）



わずかにとげが見られるヘビヌカホコリの細毛体



ウリホコリ(左)とムレミウリホコリ(右)

ハオコゼ

みなさんは海へ行ったら何をして遊びますか。海水浴や釣り、磯で生きものを観察するなど、たくさんの楽しみ方がありますが、海には危険な生物もいるということを忘れてはいけません。海の危険な生物といえばクラゲやサメなどが有名ですが、今回はハオコゼという魚を紹介しします。

ハオコゼは磯や防波堤などでもみられる赤い体色をした10cm程度の魚です。ずんぐりとした小さな

らだは一見かわいらしくもみえませんが、背ビレのとげには強い毒があります。刺されると患部が赤く腫れて激しい痛みがしばらく続くこともあります。しかし、ハオコゼが人を襲うことはなく、こうした事故は、毒があるとは知らなかった、うっかり触ってしまったなどがおもな原因で起こっています。

安全に海遊びを楽しむためにも、危険生物を事前に知っておくことは大切です。来館の際は、海の水槽

おさかな通信

の危険生物ハオコゼもじっくり観察してみたいかがでしょうか。

（水系担当 佐藤まなみ）



ハオコゼ

今秋、第1展示室に新しい隕石登場！

収蔵品紹介

2013年2月15日、ロシア・チェリャビンスク州で隕石落下というニュースが世界中を驚かせました。この隕石落下は、人が住んでいる場所の近くで起き、ドライブレコーダーなどでそのようすが多数記録されとともに、その被害が広範囲にわたったため大きなニュースとなりました。その隕石の一部がいよいよ今秋、第1展示室に登場します。

この隕石のもととなった小惑星は、直径約17m、質量約10000 tと考えられています。秒速20km近い超高速で大気圏に突入し、強く輝く火球や隕石雲がみられました。そして、上空20kmで複数の破片に分裂し、衝撃波によって建物への被害や、割れたガラスによって多数のけが人が出ました。その後、隕石の大半は大気中に蒸発してしまいましたが、一部は地表に到達し

ました。発見されている中で一番大きなものは、チェリャビンスクの西方約70kmにあるチェバルクリ湖に落下したもので、質量は600kg、落下したときにできた7～8 mの穴の底にありました。なお、チェリャビンスクの南から南西の地域にかけては何千という破片が回収されています。

今回常設展示に加わるチェリャビンスク隕石も、この回収されたもののひとつです。LL5コンドライトという石質隕石に分類され、コンドリュールという隕石に特有の球状構造もみることができます。また、この隕石以外にも、マーチソン隕石などさまざまな貴重な隕石を展示していますので、ぜひ、果てなく広がる宇宙に思いを馳せながらご覧になっていただきたいと思います。（資料課 高野朋子）



チェリャビンスク隕石



マーチソン隕石

ティラノサウルスに羽毛はあったの？なかったの？

なるほど博物館

このコーナーは、自然に関するさまざまな情報をわかりやすくお伝えするコーナーです。

今年6月にティラノサウルスの体表に関する新しい論文が発表されました。その論文では、あるティラノサウルスの化石の首、腰、尻尾の付け根にあたる部位からウロコの痕跡を報告しています。これにより、大型化したティラノサウルスの大人では体の多くの部分がウロコで覆われていたことが有力になりました。つまり、ティラノサウルスの大人において、全身が羽毛で覆われた復元は否定されたことになります。一方で

この論文の著者たちは、大人でも体の一部（例えば背中）が羽毛で覆われていた可能性や、子どもの頃は羽毛をもっていた可能性を認めています。

はたして、ティラノサウルスはどのようなすがただったのでしょうか…それを解明するのはあなたかも知れません。（資料課 加藤太一）

参考文献：Bell, P.R. et al, 2017. Tyrannosauroid integument reveals conflicting patterns of gigantism and feather evolution. Biol. Lett. 13.



ティラノサウルスの大人(体の一部に羽毛を生やした当館における復元例)



ティラノサウルスの子ども(全身に羽毛を生やした当館における復元例)

トピックス

○入館者1000万人達成記念講演会開催！

2017年5月28日、当館の開館以来の入館者数が1000万人に到達しました。これを記念し、6月10日に常総市出身で女優の羽田美智子さんの講演会「女優のお仕事、そしてふるさと、自然との繋がり」を開催しました。

羽田さんには、講演会に先立ち博物館内を案内しました。常設展、企画展のほか、せっかくの機会ですので、博物館のバックヤードを案内し、迫力満点の剥製なども紹介しました。さらに屋上から、当館の広大な野外施設や隣接する菅生沼をご覧ください。

さて、いよいよ講演会です。参加者は総勢305人となりました。羽田さんは盛大な拍手に迎えられてステージに登場しました。講演内容は当館の展示をみた感想、常総市との関わり、女優の仕事など、時間の経つのも忘れるほど楽しく、興味深く、みなさん熱心に聞き入っていました。また、質疑応答では、とても丁寧にそして優しく答えていただきました。あっという間の90分間で、入館者1000万人を記念するにふさわしい講演会となりました。（企画課 中里 賢）



記念講演会のようす

○学芸員ネイチャーガイド、はじめました。

これまで平日と土曜日を中心に実施していた「野外ガイドツアー」ですが、今年度から「学芸員ネイチャーガイド」と名称を改め実施しています。変更点は、より多くの方が参加できるよう、実施日を毎月第2・第4土曜日と毎週日曜日に設定し、さらに学校が夏休みなどの長期休業期間中には火曜日と木曜日も加えて実施しています。当日申込み制で13時30分から始まる約1時間のツアーで、担当する学芸員の専門分野をいかした野外観察会や、館内展示の見どころ紹介などを行っています。例をあげると、大きさを問わず1～3mmしかない変形菌という生きもの探しや、目を凝らすと身近でもたくさんみつかるコケの観察、野外での昆虫観察、貝の化石掘り体験などがあります。その日のガイドのテーマは、博物館のエントランスと野外自然発見工房前に掲示しておりますので、来館の際にはぜひ

確認してください。学芸員も来館者のみなさまと直接会話する機会として楽しみにしています。学芸員と一緒に四季折々の自然や展示の新しい魅力を発見に行きましょう。（教育課 後藤優介）



野外でのガイドのようす

○とんぼの池「池干し」のその後

昨年11月に、池の水と緑の再生を目指してとんぼの池の池干しを行いました。その後の経過をお知らせします。冬の間ずっと池干しを行い、3月に再び水を入れ、池干しの前に保護し、館内で飼育していたクチボソなどの在来魚を放流しました。4月半ばには、国立科学博物館筑波実験植物園の協力を得てアサザなどの水草を植えました。水草のほとんどは順調に成長し、5月下旬からアサザがきれいな花を咲かせています。

驚いたのは、植えていないはずの水草「ヒシ」が、5月上旬に生えてきたことです。ヒシは10年以上前に池に生育していた、その後枯れてしまったのですが、泥の中に眠っていた種子が池干しの影響で再生したようです。同じころ、アズマヒキガエルのオタマジャクシがカエルに成長し、池の縁にたくさん上陸しました。6月半ばには、急に水面が緑色のアオコのようなもので覆われてびっくりしましたが、顕微鏡で見るとたくさんのミドリムシのなかまでした。水温が上昇し急に増えたようで、10日くらいでほとんど消えてしまいました。さまざまな変化があるとんぼの池を、今後も見守っていききたいと思います。（企画課 鵜沢美穂子）



アサザの花(左上)、ヒシ(右上)、アズマヒキガエル(左下)、ミドリムシのなかま(右下)

昆虫展でのボランティアの活躍



昆虫スタディーコーナーで活躍するボランティア

当館では、これまでも第52回企画展「^{きかくてん}昆虫大冒険」や第63回企画展「^{かつやく}葉っぱ展」など、企画展示室内に子どもたちが楽しめる体験活動ブースを設け、そこでは当館のボランティアが活躍してきました。第69回企画展「昆虫大研究プロジェクトーあなたも研究者みんながつくる昆虫展ー」においても、これまでの企画展に負けず劣らずボランティアが活躍しています。

当館のボランティアは、博物館で自然を学びながら、イベントの運営補助、標本整理、野外の整備などをとおして博物館の運営を支えています。今回の昆虫展でも、展示室中央に設けた昆虫スタディーコーナーで、ボランティアが期間中毎日、子どもたちに向けてさまざまな体験活動を提供しています。その活動には、「ヒラヒラ飛ぶチョウ」「^{かん}昆虫缶バッジ」の作成などがあります。子どもたちは楽しそうに体験をしたり、展示をみたりしています。そのような子ども

たちのすがたをみることは、ボランティアにとっても大変うれしいことです。また、博物館で記録したチョウ58種、ハチ103種などの調査結果を標本展示しています。

今回の昆虫展のサブテーマ「みんながつくる昆虫展」の名のとおり、ボランティアの力も企画展をつくる大きな力となっています。昆虫スタディーコーナーは、開催期間中もボランティアの新たなアイデアで日々進化しています。今後もボランティアの活躍に期待してください。（教育課 日向岳王）

編集後記

今年度より、編集担当の一人に加わっています。博物館に関わる出来事をタイムリーに、わかりやすくお伝えしたいと思っています。A・MUSEUMを読んだみなさまが、ぜひ博物館に行きたいと思ってくれますように。（Y.U.）

交通案内



車ご利用の場合

- 常磐自動車道谷和原ICから20分
圏央道坂東ICから25分

鉄道・バスご利用の場合

- 東武アーバンパークライン（野田線）愛宕駅下車
～茨城急行バス「岩井車庫行き」乗車
～「自然博物館入口」下車、徒歩10分
- つくばエクスプレス、関東鉄道常総線守谷駅
下車～関東鉄道バス「岩井バスターミナル行き」
乗車～「自然博物館入口」下車、徒歩5分

※事前に発車時刻等をご確認ください。



開館時間

9:30から17:00まで
(入館は16:30まで)
※ペット、遊具、テ
ブル、椅子及びテ
ント等のお持ち込み
はご遠慮ください。

入館料

区 分	本館・野外施設		野外施設 のみ	年間 パスポート
	企画展開催時	通常時		
一 般	740円 (600円)	530円 (430円)	210円 (100円)	1,540円
高校・大学生	450円 (310円)	330円 (210円)	100円 (50円)	1,030円
小・中学生	140円 (70円)	100円 (50円)	50円 (30円)	310円

(注):()内は団体料金(20名以上)です。
未就学児・満70歳以上の方・障害者手帳をご提示の方及び付添人(当該
障害者等1人につき1人)は入館無料です。

次の日は入館料が無料です。

- 5月4日(みどりの日) ●6月5日(環境の日)
- 11月13日(茨城県民の日) ●3月21日(春分の日)
- 高校生以下の児童・生徒は毎週土曜日
(ただし、春・夏・冬休み期間を除きます。)

休館日

- 毎週月曜日
- ※9月18日(月)、10月9日(月)、11月13日(月)は
開館し、翌日が休館となります。
- ※1月2日(火)、1月3日(水)は開館いたしません。
- ※12月28日(木)～1月1日(月)は休館となります。



自然博物館ニュース A・MUSEUM (ア・ミュージアム)

A・MUSEUM (AMUSEMENT + MUSEUM)

企画・編集:ミュージアムパーク茨城県自然博物館企画課/発行2017年9月15日
〒306-0622 茨城県坂東市大崎700番地 TEL.0297-38-2000 FAX.0297-38-1999
URL: <https://www.nat.museum.ibk.ed.jp/>
E-mail: webmaster@nat.museum.ibk.ed.jp

Facebookもチェック



ミュージアムパーク茨城県自然博物館友の会
入会すると入館料が無料に! (年会費)

家族会員 4,000円 個人会員 3,000円
子ども会員 1,000円 賛助会員 10,000円
※特典 イベントへの参加、ショップ・レストランでの割引

ミュージアムパーク茨城県自然博物館は、誰もが親しめ、誰もが楽しめるア・ミュージアム(アミューズメント+ミュージアム)をめざしています。